

5 章

CONCERTO POUR UNE VOIX

Jorge N. Ferrer氏の集中講義を受けて

荒川 有加

(立命館大学大学院応用人間科学研究科)

ホルヘ氏のプラクティスはこの曲から始まった。この曲に合わせて全員が部屋を歩き出す。この講義を受ける半年前にクリスタルボウルを使って自分に必要な音（振動）を探す実践をしたことがあったのだが、その時に私が選んだ音は「レ」だった（この音はホルヘ氏の実践でいうと、vital world「生命世界」に当たる）。身体はこの生命世界の部分が肉体的に、そして思考や行動面においても、問題を抱えていることを自分自身認識した（実際に病が再発しており、考え方においても物事を生み出す力が十分に発揮できず、鬱憤を抱えていた）。その後、折に触れて下腹部に手を当てて気にかけていたのだが、「わかるようでわからない」という感じがずっと続いていた。ホルヘ氏のプラクティスでは、手を当てるのは自分ではなく他者だった（他者といっても、それは個人ではなく、その役目を担った皆の代表として行う。……私はその人を「天から使わされている人」だと思った）。他者の手が自分の身体に触れていくと、「ああ、私の身体は実際にここにあるんだ」という、自分の手の時にはなかった新鮮な喜びが湧きあがった。その手の温かさ、その触れ方にどんどん敏感になっていく。そして役割を交代して私が他者の身体に触れていくと、不思議なくらい神聖な気持ちになった。まるで手で「見る」ように相手の身体が感じられ、身体が言葉ではないメッセージを発してくる。それらは私にとってゆるぎないリアリティだった。自分ひとりで手を当てても、チャクラに関する本を読んでも、辿り着けなかった「実感」だっ

た。そしてそれは、私が多くの他者（目の前の他者や顔も知らない他者）と共に生きていること、人類のみならず太古から地球に脈々と生を受けたものが私につながっているということを実感させてくれた。

ホルヘ氏はプラクティスの守秘についてこう語った。「このグループで安心して活動するために、ここで見聞きしたことは外へ漏らさないでください。自分が体験したこと以外、メンバーが体験したことは口外しないでください。それはメンバーへの敬意と思いやりから生まれる行動であってください。禁止されているから、破ると責められるからという動機ではなく……」。敬意や思いやりは、頭で理解しただけでは実際の行動に結びつかない。体験と感覚に基づいた理解であれば、心底わかって行動する（身体が動く）ことができる。それまでの自分の中での敬意や思いやりの概念が、微妙に変容するのを感じた。

この文章を書き始めるにあたって、プラクティスで私が描いた5枚の絵を出してきた。1枚目の絵を前に置いてピアノで「CONCERT POUR UNE VOIX」を弾いてみた。2枚目から5枚目までは、絵を見ながら即興演奏をし、最後にもう一度「CONCERT POUR UNE VOIX」を弾いた。それぞれの絵によって私が表現していたメッセージが、改めてはっきりと再現された。自然と共生し、宇宙の天体とつながっていた頃の身体の記憶、体内の芽吹き、動物の姿で包んでくれる生命の愛、漂う水草、異端者への弾圧のあと最終的に宇宙の天体へ戻ってゆく自分の姿……。 「一声」(UNE VOIX)は、私の声、私の身体の声だった。そして他者も各々「一声」を持つ存在だ。

私が声のソリストになる時、目の前の他者（他者たち）はTUTTI（オーケストラ）になって私を支え、交流し、響き合って、生かしてくれる。そして目の前の他者がソリストになる時には、私はTUTTIの一員になる。他者が聞いている自分の声を、自分で聞くことは出来ない。自分の声はこうだと思っても、実はそれが全てではない。ホルヘ氏の講義で、私一人では気がつくことができなかった「己の一声の真実」に、他者と共に辿りつく喜びを体験した。